

仕事の時も笑顔絶やさず



職場の仲間と（右から3人目が筆者）

日本とメキシコとの関わりは1609年、フィリピン諸島総督ロドリゴ・デ・ビペロを長とする船団が、ヌエバ・エスパーニャ（当時のスペイン領メキシコ）への帰国途中、千葉県御宿沖で遭難。村人の献身的な救助により、乗組員317人が救出されたことから始まる。その後謁見した徳川家康はビペロ一行のために船を建造しメキシコに送り届けた。日本とメキシコには400年以上の交流の歴史がある。

商社に勤務し、入社以来メキシコには3回駐在し、通算14年半を過ごした。また幸運にも一時期、現地の商工会議所の運営にも携わらせていただいた。

インフレ対策 あの手この手

私は幸いにして1994年の通貨危機の直前に離墨したが、当時でもインフレ、ドルに対する通貨ペソの減価はひどく、特にペソ建て給与の場合は、もらった時点と次の給料日前ではドルベースでは半減ということもあった。通貨の急速な目減りに対応するため給与は月2回に分けて支払われるようになった。今もこのやり方は続いているようだが、理由はいったん給料をもらおうと全部使い切ってしまうので分けている、という説が有力である。

当時、私はタイヤの販売を担当していた。代理店がどんどん発注してきたので驚き、かつ喜んだことがあった。ところがお客を訪問してみると、

丸紅テクノラバー株式会社
常務取締役 柚木利啓

どう見ても半年分以上の在庫の山。それでもまだ買いたいと言う。尋ねてみるとお金で持っていたくない、モノに換えておきたいということだった。

その後はIMFの指導勧告もあり、公団公社の民営化、インフレ退治の施策などがありメキシコは安定、発展していくが、特に大きかったのは自由貿易へと舵を切りNAFTA（北米自由貿易協定）を始め、日本を含む数多くの国・地域と自由貿易協定を締結したことだろう。公団公社の民営化により政府財政の立て直し、公務員特権の見直しが行われ、インフレ退治により社会は安定し始めた。その上で締結されたNAFTAは、賃金の安いメキシコで生産し隣接する巨大な米国市場に関税なしで輸出できるという立地条件を活かした経済再建策と言える。米国に敗れた米墨戦争の際には「可愛そうなメキシコ。神にはこんなに遠く、米国にはこんなにも近い」という冗談があったそうだが、これを逆手に取って国益に結び付けたことになる。

相手をいたわる配慮が大事

メキシコの人口は1億2000万人（世界11位、日本は10位、フィリピン12位）、平均年齢は27歳と若く、出生率も2.24（日本は1.46、2015年）とこれからも労働人口が増えていく環境にある。民族としてはスペイン人による征服の後、混血が進み今やメキシコの人口の多くがメスティーソと呼ばれるスペイン人とインディオとの混血である。彼らの間には、自分は征服者の子孫なのか被征服者の子孫なのかよく分からない、ロスト・アイデンティティというわだかまりがあるようだ。